学苑・文化創造学科紀要　No. 805　(1)～(8)（2007・11）

絶対的現在と相対的現在

井　原　奉　明

1　はじめに

ウィトゲンシュタイン『論理哲学論考』（以下，『論考』と略）を繙いてみた時，ある特徴的なことに気づく。変化について「極端とも思える程ほとんど語られていない」[1] し，時間は考察の主対象とはされておらず，現在・過去・未来に関してもほとんど語られない。しかしながら，ウィトゲンシュタインが変化や時間といった問題について関心を持たず，考察していなかったわけではない。同じ問題圏にあった[2]と考えられる『哲学的考察』（以下，『考察』と略）において，それらの問題は俎上に載せられ，検討されているからである。

この小論では，変化というテーマを紐帯として『論考』から『考察』までをつなぎ，考え方の連続性と非連続性を探ることによって，『論考』ではなぜ時間の経過をないものと考えることができたのか，そのテーゼがなぜ否定されるのか，『考察』においてどう踏み出していくのかを明らかにし，その中で鍵となる絶対的現在と相対的現在という概念を区別してみたい。

2　『論考』から『考察』へ

2-1　『論考』の変化論　―状態変化

『論考』の中で変化についてポイントとなるのは，2.027 から 2.0272 の三つの節である。[3]

2.027　不変なもの，存在し続けるもの，対象，これらは同一である。

2.0271　対象とは不変なもの，存在し続けるものである。対象の配列が，変化するもの，移ろうものである。

2.0272　対象の配列が事態を構成する。

これら三つの節から『論考』では，変化として対象の状態変化を考えていることが窺える。ある状態から別の状態への変化が成り立つためには，二つの状態の間で何らかの同一性が保たれたまま，何かが変わらなければならない。もし同一性が保たれないのだとしたら，ある状態と別の状態は単に無関係な別々の状態とみなされ，それを関係づけて変化があると言うことはできないだろう。また，もし何も変わらないのだとしたら，変化などそもそも存在しないと言うしかない。ウィトゲンシュタインによれば，同一性が保たれるものは対象であり，変わる部分は対象の配列，すなわち事態である（『論考』2.027，2.0272 参照）。同一性を保たれる対象は，すべての変化を通じて不変かつ恒常的な存在であり，実体と呼ばれる（『論考』2.027，2.0271，2.021 参照）。

変化に関するこのような考え方は，一見きわめてオーソドックスに見える。フォジェランは，『論考』の変化論における対象の役割が原子論的であると論じ，それを「古典的な原子論」の徴であると

考えている。彼によれば「古典的原子論」は次のような特徴を持つ。[4]

(A) 変化（広い意味で）とは，構成要素が互いに結びついたり離れたりすることによって起きる。

(B) あらゆるものが変化するわけではない。というのも，変化に対しては不変の土台がなければならないからだ。原子，つまり何かと何かが結びついたものでもなければそれ以上分割できるものでもないもの，がこの不変の土台を作り上げる。

(C) 構成要素が互いに結びついたり離れたりすることができるのは，それを可能にする場を用意する空間の中に原子があるからである。

『論考』のテクストには「古典的な原子論」に沿う節が確かに見出せる。(A) は『論考』2.0271に対応し，(B) は『論考』2.027，2.0271に，(C) は『論考』2.013「いかなるものも，いわば可能な事態の空間のうちにある。私は，この空間が空（くう）であると考えることはできるが，空間を欠いたものを考えることはできない」に対応している。しかし，『論考』の変化論には独自の着想と枠組みが潜んでいる。その鍵は対象の性質，像の無時間性と事実の無変化性という特徴にある。

2-2 対象の性質 ―像を使わなければ対象に辿り着けない

まず，対象について考えてみる。『論考』において，対象とはどのようなものか，どのようにして対象に辿り着けるか，簡単に振り返ってみよう。

『論考』において，世界とは成立していることがら，現実に他ならない。その世界は事実の総体であるから諸事実に分解される。ただし，この世界を対象の総体と考えることはできない。なぜなら，私たちが生きるこの世界で出合うのは性質や関係を持った対象，つまり事実であり，性質や関係を剝ぎ取られた対象や，何物とも結びつかない単独の性質や関係と出合うことはないからだ。また，事実をいくら見ていても対象を見出すことはできない。対象は論理形式を備えているとされるが，事実をどれだけ注意深く見ても論理形式は見えないからである。[5] ではどうやって対象の論理形式を捉えることができるのか？　そのためには像を使わなければならない。事実を（その事実と内的関係で結ばれた）命題で写し取り，それを要素命題に分析し，そこからさらに分解して名を取り出す。名は対象と同じ形式を備えたものとされ，対象を指示するものである。だから，名を取り出すことができれば，それに応じて対象に辿り着くことができるのである。もう少し正確に言えば，名を取り出すことによって有意味な命題の総体を構成することができ，それによって論理空間が開かれる。「論理空間を構成する要因として，一方では操作に基づく論理が，他方ではその基底となる要素命題およびその構成要素となる名，そして名が表わす対象が取り出される。かくして事実の中に埋め込まれていた対象が実体として姿を現わす。」[6] このようにして，対象に辿り着くためには像（たとえば命題）とその像全体（たとえば言語）が必要とされるのである。

『論考』における世界は現実世界であって，成立していない事実（可能性）は世界のどこを探してもない。その事実を（内的関係で結ばれた）命題で写し，対象を取り出してくるのだから，対象は現実に存在し，現実から切り出されるしかない。にもかかわらず，現実世界だけで対象に辿り着くことはできない。像を使い，その像の総体が必要なのである。この点にウィトゲンシュタインの独自性がある。

『論考』では，対象の同一性が保たれたまま，その結びつき（組み合わせ）が変わると考えることによって変化を捉えている。ただし，異なる状態を通じて同一性を保つ対象は，像および像の総体がな

ければ辿り着けないものである。対象は，現実に存在するという意味で世界の実体を作り上げている一方，事態の構成要素であるという意味で像および像の総体に拠っている。故に，もし像が作れないならば，異なる状態を通じて同一性を保つ対象は取り出せないことになる。像が作れない場合，単に異なる状態が連続的に推移していくようにしか見えないだろう。

2-3　像の無時間性と像を通した事実の無変化性

先の段落の最後に，「像が作れない場合，単に異なる状態が連続的に推移していくようにしか見えないだろう」と書いた。注意深く言えば，「異なる」「状態」「連続的」「推移」「見る」といった概念を正確に説明しておかなければ誤解を招くだろう。ここでは状態という概念を検討するところから始めたい。

『論考』では，状態をすでに輪郭を備えたものとみなしているのであろうか，それとも未分節のものとみなしているのであろうか？　対象概念から考えてみれば，現実世界は，像を通して見なければ形式を持たない未分節なものとなるだろうし，他方，像を通してみれば形式を備えた分節済みのものとなるだろう。『論考』では明確にされていないが，『考察』までを視野に入れれば，像を通さない現実の世界は流動的であり，状態推移は輪郭を持たない状態が連続的に推移すると考えているように思われる。それに対し，像を通した世界は，静止した像が非連続的に推移すると考えられている。像を通さない現実の世界について『考察』では次のように述べている。[7]

> 生のままのデータの世界が無時間であるとすれば，そもそもどうしてそれについて話をすることが可能であろうか？
>
> 生の流れ，あるいは世界の流れは，流れ続ける。(『考察』48)

像を通した現実の世界についてはこのように述べている。

> 直接経験の事実をスクリーン上の像と比較し，物理学の事実をフィルムの帯の上の像と比較するならば，フィルムの帯の上には現在の像，過去・未来の像が存在する…。(『考察』51)

像を通した世界はフィルムの帯の上の像と喩えられている。この比喩から窺えるのは，像を使う場合，連続的な推移を連続的に写すことはできず，非連続的な推移としてしか写し出せないということである。これこそ，『論考』においてウィトゲンシュタインが考えていた変化論に他ならない。

連続的に推移する世界の動的な時間変化を，状態変化によって示す，と考える時，像の方で静止している像を使うことは容易に理解できるが，それに対応する事実の方も実は静止していることに気づくのは難しいかもしれない。この点を説明してみよう。

現実世界には常に新たなことが起き，絶えず「なる」という動きが実現している。途切れることなく，切れ目なく連続的に変化し続けている現実世界は像を使わない限り未分節である，と既に述べた。連続的に変化する現実世界は，そこに変わらない要素という楔を打ち込まない限り，実は変化を認識されることもない。言ってみれば，単なる連続的な推移が起こっているだけで，正確な意味ではそれを変化と呼ぶことはできないだろう。このような現実世界を像によって把握した時，初めてそれと内的関係で結ばれた事実が輪郭を持たされ，内部に論理形式を持つものとして現実世界から切り出される。像を使うことによって，像だけでなく，事実の方も連続的な世界の中から非連続的なものとして

切り出されるのである。

わかりにくいだろうか。像を命題と置き換えて再度説明してみる。動的な変化を命題で写し取った時，命題は変化という動きをいわば凍結させ固定してしまっていることがわかる。どんな命題であっても時間の経過と共にひとりでに変わってしまうことはあり得ない。つまり，命題の中の名や記号，音や文字が変わってしまったり，意味が変わったりすることはなく，命題は時間が経過してもそのままである。このことは，命題と同様，それと内的関係にある事実にも当てはまる。事実も，命題によって記述されると同時に，移ろい行く状態に区切れ目を入れられ，その前後から非連続的に切り出される。いったん切り出された事実は，時間の経過と共に変化することはない。

いや，事実は変化すると反論する人がいるかもしれない。そう反論する人は，事実という概念のここでの使い方をおそらく誤解しているのだ。注意したいのは，命題によって記述された「この事実」は変化しないということだ。例を挙げてみよう。「A君が笑うのを私は見た」という命題を例にとる。この命題は，未分節の連続的な現実世界から，《A君が笑うのを私が見た》という事実を非連続的に切り出してくる。この場合，現実世界は変化するからA君はずっと笑っているわけでなく，そのうちに普通の表情に戻るだろう。しかし，《A君が笑うのを私は見た》というこの事実は変わることがない。時間の経過とともにこの事実が《A君が笑うのを私は見なかった》と変わったり，《A君が泣くのを私は見た》と変わることはあり得ない。どのような事実をとっても，「この事実」は変化しない。《カエサルがルビコン川を渡った》という事実だって，《秀吉が大阪城を築城した》という事実だって，《きのう私は転んだ》という事実だって，ひとりでに変わってしまうことはあり得ない。現実世界が変化しても，ある時点の状態を記述した命題とそれに対応する事実は変化しない。[8] 時間が経過しても，それらは紙の裏表のように，変化しないままその時点に留まり続ける。[9]

この点は，別の像，たとえば写真を比喩として使えば理解しやすいだろう。写真を撮影した時，写された事実は輪郭を明確に持ち，変化をそこに閉じ込めてしまう。写真に写し出された人々や景色がひとりでに変化していくことはあり得ないし，その写真に対応する（その）事実が存在しなくなったり変わってしまったりすることもあり得ないのである。

『論考』の変化論は，このような枠組みに基づいている。現実世界は連続的に変化していくのだが，それを事実の総体とみなす時は，変化を固定され静止した，非連続的な事実の総体とみなされる。『論考』に沿った言い方をすれば，像を通して現実世界を見たら，変化を固定された無時間的な世界が姿を現し，そして対象を礎石とする無時間的な論理空間を開くことができるのである（『論考』6.45参照）。

こうして，『論考』においてウィトゲンシュタインは，像を使う限り，無時間的な扱いが可能なのであり，動的な変化は捨象することができると考えた。だからこそ，できごとの経過や時間の経過はないと考えたのである（『論考』6.3611参照）。

2-4　時間の経過はないと考えられるのか？

しかし，できごとの経過や時間の経過をないものと考えた時，ウィトゲンシュタインは正しかったのか？　私は間違っていると思う。

『論考』で状態変化を考える時，少なくとも二つの事実が必要だ。その二つの事実には，同一性を保つ対象が含まれていて，なおかつ変わる部分がなければならない。『論考』では，この二つの事実

があるとき，その事実を記述する命題の真理値が真から偽へ交代することをもって，変化と考えていた。

しかし，命題の真理値が交代すると考える時，実はすでに時間の移動という動きと方向性が前提とされてしまう。二つの事実は，時間的移動をもし捨象してしまえば，それぞれがある時点に静止したまま留まり，単に二つの事実が並列されているようにしか考えられない。「先の」事実から「後の」事実という時間的な移動と方向性が伴わない限り，変化は変化とみなされないはずである。二つの事実の「間」に「時間の経過」があって初めて，二つの事実が「より前」「より後」という関係で結ばれ，変化を捉えることができるのである。

ウィトゲンシュタイン自身も，『考察』においてこの誤りに気づいているように思われる。彼は，『考察』の中では現在・過去・未来といった時間様相を表わす表現を導入し，事実や言語が時間的な流れの中に位置づけられると主張している。

『考察』では，事実を物理学的事実と直接経験（または現象）の事実とに区別する。物理学的事実には現在・過去・未来があり，それぞれが写像可能とされ，そこでは（動的な変化ということではないが）時間の経過が考えられている。また，像（言語）も同様に時間の経過と共にある，と考えられている。『考察』から関連する節を拾っておこう。

> 直接経験の事実をスクリーン上の像と比較し，物理学の事実をフィルムの帯の上の像と比較するならば，フィルムの帯の上には現在の像，過去・未来の像が存在するものの，しかしスクリーン上には現在のみ存在する。（『考察』51）

> 言語は時間的に流れていく。
> 「言語」という語によって我々が理解していることは，物理的時間の中で流れていく。
> 私が記号と呼ぶものは文法において記号と呼ばれるものでなければならない。フィルム上のものでなければならず，スクリーン上のものであってはならない，―こう私は言いたい。（『考察』69）

> 我々は我々の言語と共にいわばフィルムの領域にいるのであって，射影された像の領域にいるのではない。（『考察』70）

『論考』においてできごとや時間の経過はないと考えたのは誤りであった。できごとや時間の経過は間違いなくある，『考察』のウィトゲンシュタインはそう考えている。

2-5　絶対的現在と相対的現在

『考察』において，物理学的事実と直接経験の事実が対比されているが，これは現在に関する概念規定の相違に基づく区分であると私は考える。ここで，絶対的な現在と相対的な現在という用語を導入して説明してみたい。

先に引用した節に，直接経験の事実は現在しかない，現在のみが存在する，それに対し物理学的事実には，現在・過去・未来がある，とあった。物理学的事実の場合，現在・過去・未来という時間規定が適用されるわけだが，このような現在を相対的な現在と呼ぶことにする。相対的な現在とは，「単独では価値を持たず他の項との差異において初めて価値を持つ」「隣接項を持つ」などという在り方をするもので，だから相対的な現在は，過去・未来という隣接項を持ち，「過去―現在―未来」と

いう流れの中の一項として位置づけられる。一方，直接経験の事実の場合，現在しかないとされる。この場合の現在は，絶対的な現在と考えることにする。絶対的な現在は，「存在しないことが考えられない」「それがすべてでありそれしかない」「それ単独で価値を持つ」「隣接項を持たない」という在り方をする。だから絶対的な現在は，存在しないことがあり得ず，何がどうあっても世界の在り方に関わりなく常に現在なのであって，現在が現在でなくなることはなく，隣接項を持たないで絶対的な価値を持つ。絶対的な現在は，現在しかないが故に，「現在である」と言うことに意味がないとも言えよう。この区別を念頭に置くと，以下の『考察』の節が容易く理解されるだろう。

> 物理的世界での現在の出来事，過去の出来事，未来の出来事の話をするのは可能であるが，しかし現在の表象，過去の表象，未来の表象について話すのは不可能である…（中略）…従って物理学的なものの言葉に対して妥当する構文論の規則である時間概念を，それとは根本的に異なる表現様式が用いられる表象の世界に対して適用することは不可能である。(『考察』49)

> 現在の経験のみが実在性を持つ，と言われる時，他の結合で登場する「私」という語と同様に，ここでは「現在」という語が余計であるに相違ない。というのもそれは，過去や未来と対比された現在を意味することはありえないからである。その語によって意味されているのは別なこと，即ち空間内にあるものではなく，空間それ自身，に相違ない。(『考察』54)

> ここで話されている現在とは，映写機のレンズの位置に丁度今あるフィルムの帯の像のことではない，―この像はそれの前後にあり既にそれ以前にレンズの位置にあったかあるいはまだレンズの位置に来ていないその他の像と対比される。そうではなく今問題となっているのはスクリーン上の像であり，それは不当にも現在と呼ばれているのである。というのもここでは「現在」は過去・未来と相違するものとして使用されてはいないからであり，従ってそれは意味のない修飾語なのである。(『考察』54)

絶対的な現在という考え方が，『論考』において中核として働いていることは，もう自明であろう。絶対的な現在は，世界の中で存在したりしなくなったりすることはない。そして，絶対的な現在は，逆説的なことだが，絶対的な存在であるが故に消去されている。絶対的な現在は，すべてが現在というあり方をし，この世界を限界づけ，世界全体を成立させている条件であるにもかかわらず，世界の中には不在なのである（いや，だからこそ不在だというべきかもしれない)。絶対的な現在は，過去や未来と隣接しないことによって時間の流れを奪われる。現在は現在でありながら，時間は決して経過せず，去ることがない。この意味において現在は世界の限界として現れるのである。

『論考』においてできごとや時間の経過がないと考えたのは，変化が固定されてしまうからであると同時に，絶対的な現在という前提をウィトゲンシュタインが隠し持っていたからに違いない。そう考えれば，『論考』において，現在・過去・未来に関する叙述が圧倒的に少ない理由も首肯できるだろう。[10]

3 『論考』のその先へ

『考察』においてウィトゲンシュタインはもはや絶対的な現在を前提とする枠組みを目標としていない（『考察』1，53)。絶対的な現在に基づく考え方を捨て，相対的な現在という考え方の中で変化を考察し始めている。彼は，私たちが言語と共に現在・過去・未来を持つ物理学的事実の側にいると考

える。だからこそ，『考察』において，記憶，予想，想起，そして再認について考察を巡らせ始めるのである。『論考』ではほとんど注目されなかった，いや注目する意味がなかった記憶，予想，想起，再認について検討し始めているのは，できごとや時間の経過を考える必要性に気づいた証拠である。

中でも『考察』のウィトゲンシュタインが再認についてよく考えているという点は，いくら強調しても強調しきれないほど重要である。記憶や想起が過去の事実（不変のままいわば過去に置き去りにされた事実）の同一性に関わるのに対し，再認は事実でなく対象の通時的同一性に関わるものだからである。

『考察』の中でウィトゲンシュタインが再認について考察し始めた時，彼は時間の経過を前提として，対象の通時的同一性を問い始める方向へすでに一歩踏み出しているのだ。時間の経過を認めたウィトゲンシュタインは，対象が不変かつ恒常的に自己同一性を保持することを要請できなくなっている。『考察』では，時間の経過をまたぐ対象の通時的同一性は，内的関係を再認することが必要だと考えられているからだ（『考察』16，21）。

私自身の考えでは，変化と通時的同一性は共在しえない。通時的同一性があるところでは変化を無視しなければならない。たとえば『論考』において，絶対的な現在を前提し，時間の経過を無視してしまうということは，つまり対象の同一性を優先させ，変化を背後に押しやってしまうことに他ならない。だからこそ，『論考』の対象は同一性を保持したまま不変であるとみなされる。それに対して，変化があるところでは通時的同一性が無効とされなければならない。変化に気づいたということは，いったん通時的同一性を断ち切ったということである。変化を認める時，通常私たちは，いったん断ち切られた通時的同一性を再びつなぎ合わせ同一対象が変化したと考えるのだと思う。

通時的同一性を疑わないのであれば，そこに変化は見出せず，再認も問題とならないだろう。再認は，通時的同一性がいったん断ち切られたかもしれない可能性にウィトゲンシュタインが気づけばこそ，検討されているのである。

ここから，対象自体が変化する可能性を追究し始めるまで，道はそれほど遠くない。

注

1　P. M. S. Hacker “Laying the Ghost of the *Tractatus*”, in Stuart Shanker (ed.) (1986), p. 79

2　『考察』で展開される問題とその考察は，『論考』のものとは異なると主張する人もいるだろう。しかし，『論考』の補完として『考察』を読むことによって，『論考』の問題とその考察が一層拡げられ深められる場合が多い。そのような視点からの検討は意義深いと筆者は信じる。同様の考え方を持つ者として鬼界も，「そこ（筆者注:『哲学的考察』）に示されている思考は『論考』の言語観の延長であり，『論考』体系のギャップとして残された部分の補完である。このように『論考』の思考と『考察』の思考は対立するのでなく連続しており，『論考』・『考察』期というとらえ方をするのが有益な場合すらある」と述べている。鬼界（2003）p. 199

3　『論考』の翻訳は何種類も出ているが，ここでは野矢茂樹訳を使う。

4　Fogelin (1987) p. 5　訳は筆者による。

5　論理形式とは，ある対象がどのような性質や関係を持ちうるか，他のどのような対象と結びつきうるかという可能性の範囲を示すものである。

6　野矢（2002a）p. 264

7　『考察』の翻訳は奥雅博訳を使う。

8　時点という概念は実は使いたくないが，理解しやすくなると思い，使った。

9　「この事実が変化しない」という論点はありきたりだと思うが，これを事実の定時的同一性と呼ぶことは野矢（2002b）に教えられた。野矢（2002b）p. 133 以降参照。

10　『考察』においてウィトゲンシュタインは，「かつて」という言い方で『論考』（およびその思考）を示唆する表現を使う。しかし，それは主に直接経験や現象に関わる部分であり，『論考』にはそれを示唆する部分もあまりない。この点，様々な意見が出されてきた。私は，この絶対的な現在という概念が『論考』で中心的に働いていたこと，『考察』ではそれを直接経験や現象に関わるものと考えていたことが，この問題を解くひとつの鍵となると思う。

引用文献

ウィトゲンシュタイン『論理哲学論考』野矢茂樹訳 岩波文庫 2003.

ウィトゲンシュタイン『ウィトゲンシュタイン全集 2 哲学的考察』奥雅博訳 大修館書店 1978.

鬼界彰夫『ウィトゲンシュタインはこう考えた』講談社現代新書 2003.

野矢茂樹『ウィトゲンシュタイン「論理哲学論考」を読む』哲学書房 2002a.

野矢茂樹『同一性・変化・時間』哲学書房 2002b.

P. M. S. Hacker "Laying the Ghost of the *Tractatus*" in Stuart Shanker (ed.) *Ludwig Wittgenstein Critical Assessments* Volume One, Croom Helm, pp. 76–91, 1986.

Fogelin, Robert *Wittgenstein* (2nd ed.), Routledge & Kegan Paul, 1987.

（いはら　ともあき　　文化創造学科）